



ひめゆり平和記念資料館

# 資料館だより



## 目次

- 「元ひめゆり学徒による講話」予約受付終了のお知らせ・・・1
- 資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
  - 入館者 2000 万人／教員のための展示ガイドツアー開催／教員向け講習会開催／夏休みイベント「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「ひめゆりの映像上映と説明員トーク」開催／開館 25 周年記念特別展「ひめゆりの証言員たち—沖縄戦を伝えてきた 25 年—」開催中／荒崎海岸「ひめゆり学徒散華の跡」碑の香炉が一時紛失／「ウチナージュニアスタディー事業」の平和学習を実施／ハンマーダルシマー平和祈念演奏会／2014 年度学芸員実習
- 研究ノート⑧ 荒崎海岸「ひめゆり学徒散華の跡」碑の歴史・9
- 仲宗根政善日記抄(50)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
- 本棚（仲程昌徳）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
- 声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
- コラム 相思樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
- 資料館ガイド・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第54号

2014.11.30

## 「元ひめゆり学徒による講話」 予約受付終了のお知らせ

当館は、本年6月23日に開館25周年を迎えることが出来ました。これもひとえに多くのみなさまのご支援の賜と心より感謝しております。

開館以来、当館では、元ひめゆり学徒が「証言員」として展示室内での説明や、修学旅行団体等への戦争体験講話など、戦争体験を語り継ぐ活動を続けてまいりました。

25年という時間の経過にともない、現在、証言員の人数は開館時の約3分の1の9人となり、60代前半だった証言員は80代後半となりました。年齢や体力を考慮した上で、このような状況の中で、今後、体験講話をどうしていくかについて、証言員と職員とで話し合いを行ったところ、半年先の講話予約をお受けすることは難しいとの結論に至りました。

つきましては、来年4月以降は「元ひめゆり学徒による講話」を終了し、資料館の説明員や学芸員による「次世代による平和講話」という形で引き継ぐことになりました。説明員や学芸員は、これまで長い時間をかけて元ひめゆり学徒たちから直接学び、一緒に調査研究を続け、多くの来館者へ説明をしてきました。この「次世代による平和講話」が修学旅行をはじめとした平和学習を行うみなさまの学習の一助となるものと確信いたしております。展示室内での証言につきましては、4月以降も続ける予定です。

「元ひめゆり学徒による講話」のご予約は2014年9月の受付（2015年3月分予約）をもちまして終了となりました。10月分以降受付分（2015年4月分予約）からは、「次世代による平和講話」としてのご予約となりますので、ご了承下さい。

なお、2015年4月以降のご予約分に関しましても、ご来館当日に元ひめゆり学徒が次世代の代わりに講話を行うことが可能な場合がございます。ご予約の際に、元学徒の講話を希望する旨をお申し出下さい。

詳細につきましては、当館（098-997-2100）までお問い合わせ下さい。

どうぞご理解いただき、今後とも当館への変わらぬご支援・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。



資料館入口での講話（多目的ホール建設前）



館内講話の様子

# 資料館トピックス

## ◆入館者 2000 万人

開館 25 周年の節目に当たる今年、当館の入館者数が 2000 万人を迎えました。

2000 万人目の入館者は、8 月 23 日に入館した愛媛県の渡辺早百合さんで、職場の同僚の方とのグループ旅行で沖縄を訪れました。記念セレモニーが行われ、館長の島袋淑子より認定証と記念品が手渡されました。館長は、「開館したときはこんなにたくさんの方がご来館下さるとは思わなかった。今後も多くの人々に訪れてほしい」とあいさつしました。

渡辺さんは「びっくりしています。ひめゆりの塔のことは、戦争で女学生が犠牲になったということを知っていました。また、戦争の記憶が薄れてきていると感じていて、改めて思い出すためにも一度は行ってみたいと思っていました。」と感想を述べられました。



2000 万人目の入館者渡辺早百合さん（右）



職場のみなさんも一緒に記念撮影

## ◆教員のための展示ガイドツアー開催

8 月 9 日、「教員のための展示ガイドツアー」（午前・午後計 2 回）を開催し、8 名の方が参加しました。

当館は来館者数の約 50 パーセントを学校団体が占めています。そこで夏休みに校外学習などで当館を利用する予定の学校の先生や、沖縄戦を学びたいと思っている先生たちに、当館の展示を知っていただく機会をつくろうと開催しました。

普段来館者に展示説明をしている説明員が、児童・生徒が興味・関心を持ちやすい展示を通して「ひめゆり学徒たちが沖縄戦の時どんなことを考え、感じていたか」を中心に展示ガイドツアーを行いました。

参加者からは、「こういう企画に参加したい教員は多いはずなので、ぜひ今後も回数を増やして開催してもらいたい」という声がありました。今後も継続して開催していきたいと考えています。



展示を解説する説明員



## ◆教員向け講習会開催

8月15日に「ひめゆり平和祈念資料館 教員向け講習会」を開催し、県内の小学校、中学校、高等学校の先生方など20人が参加しました。ひめゆり学徒隊と沖縄戦について理解を深めてもらうとともに、ひめゆり学徒隊をテーマにしたワークショップを紹介する機会にしたいと、毎年この時期に実施しています。

講習会では、ひめゆり学徒の戦争体験講話（島袋淑子館長）、アニメ「ひめゆり」上映、ワークショップ体験などを行いました。参加者の意見交換では、「平和教育の担当になっても何から手をつけたいかわからないという先生もいるので、このような情報交換の場はありがたい。今日学んだことを他の先生にも伝えたい」、「事前学習をどうすればいいのかが難しい。急に悲惨な映像を見せると、生徒が心を閉ざすこともある」、「ワークショップは有効だと思う。教師の仕事は、子どもたちが証言を見られる段階までもっていくこと。そのためには子どもたちが自分のこととして受け止められるような工夫が必要になる。」などさまざまな問題意識や提案が出されました。



写真を観察して読み解く



参加者全員で意見交換を行う

## ◆夏休みイベント「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「ひめゆりの映像上映と説明員トーク」開催

7月31日から8月3日と、8月20日から24日の計8日間、2014年度夏休みイベント「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「ひめゆりの映像上映と説明員トーク」を開催しました。今年は午前に「説明員トーク」を、午後に「戦争体験講話」を行いました。

通常「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」は主に修学旅行などの団体を対象に行っていますが、一般の方々にも聞いていただこうと夏休みに企画しました。2009年から開催し、夏休み恒例のイベントとなっています。

今年も毎回50名以上の参加があり、幼児から69才以上の方まで幅広い年齢の来館者が、ひめゆり学徒の体験に、真剣に耳を傾けました。

「ひめゆりの映像上映と説明員トーク」では、日替わりで当館制作の「ひめゆりの戦後」と「アニメ ひめゆり」を上映し、視聴後に戦争体験のない説明員が、映像にまつわるエピソードや、沖縄戦中・戦後のひめゆり学徒の思いなどを中心にお話しました。

参加者アンケートには、「今日のような時代だからこそ、体験者の話を聞いて、自分で考えることが大切だと思う」という感想や、「このようなイベントで後世に戦争の恐ろしさや悲惨さを伝えていくことは大事だと思う」という声が寄せられました。



元ひめゆり学徒の戦争体験講話



映像上映と説明員トーク

## ◆開館 25 周年記念特別展 「ひめゆりの証言員たち—沖縄戦を伝えてきた 25 年—」開催中

7月18日から、開館25周年記念特別展「ひめゆりの証言員たち—沖縄戦を伝えてきた25年—」を開催しています。

沖縄戦で多くの学友を失った元ひめゆり学徒は、戦後「生き残って申し訳ない」という思いを抱き続けていました。戦後40年が経ち、戦争の記憶の風化が進む中で、ひめゆり学徒の戦争体験を後世に伝えようと、ひめゆり同窓会はひめゆり平和祈念資料館を建設します。開館後、元ひめゆり学徒たちは「証言員」として、展示室内での来館者への説明や館内外での講話など、戦争体験を伝える活動を担っていきます。資料館で活動していく中で、沖縄戦を知らない人があまりにも多いことを知り、沖縄戦を伝えることの重要性を実感していったのです。

2000年代に入り70歳を過ぎた証言員たちは、資料館を次の世代に引き継ごうと「次世代プロジェクト」をスタートさせ、職員への引き継ぎを意識しながら活動してきました。

今回の特別展は、証言員のこれまでの活動の歩みを振り返る内容となっています。引率教師だった仲宗根政善先生やひめゆり同窓生が集めた「遺影のアルバム」、平和講演の予定を書き留めた手帳、2004年リニューアル時に証言員が書いた展示テキストの草稿などを初めて展示しました。特別展に合わせた新作映像（約20分）も上映しています。

特別展は2015年3月31日までの開催です。多くのおみなさまのご来館をお待ちしております。



展示を見学する証言員



特別展オープン時のテープカット

～来館者のアンケートより～

- ・25周年ということに驚いた。そしてそれが、ひめゆり同窓会の方々の発案だったということに、すごいと思った。とてつもなく強い思いで、この資料館をつくったことが想像できる。(沖縄県 22歳 男性)
- ・“生き残ってしまった”から“生かされた”という言葉、真にそうだと感じました。意味を持って生きていく大切さを教えていただきました。(神奈川県 31歳 女性)
- ・生き残って地獄を味わった場所に再び来ることさえ胸が痛かろうと思いますのに、思い出し語り伝える葛藤、のりこえてきた数々のことを思うと、言葉もありません。今日は娘(7才)の希望で来ました。握手をして頂きました。その手の感触を生涯憶えてほしいと思います。(熊本県 42歳 女性)
- ・どんな思いで、生き残った方たちが資料館をつくったのか、取り組みを続けてきたのか、が感じられた。今、ますますこの資料館の持つ役割の重さは大きくなっていると思う。今後もがんばって欲しい。私自身ここで感じたことを大切に、「戦争をやれる国」づくりを絶対に止めるために、頑張っていきたい。(石川県 36歳)



展示を見学する修学旅行生



参観風景

## ◆荒崎海岸「ひめゆり学徒散華の跡」碑の香炉が一時紛失

沖縄本島南端の荒崎海岸には、沖縄戦時にその付近で亡くなったひめゆり学徒・教師を慰霊する「ひめゆり学徒散華の跡」碑が建てられています。



再設置された荒崎海岸の香炉



荒崎海岸の碑と香炉



8月7日、その「ひめゆり学徒散華の跡」碑の香炉が紛失しているのがわかりました。当館職員が戦跡めぐりで訪れた際に気づいたものです。

その後27日に、取材のために荒崎海岸を訪れたテレビ局スタッフが、すぐ近くの岩のくぼみで香炉を発見。岩にこすったためか表面が欠けたり、傷がついたりしていました。

香炉の移動が人の手によるものなのか、大波などの自然によるものなのかは、現在のところ不明です。沖縄気象台によると、荒崎辺りの海岸には、7月末の台風接近時5～6メートルの大波が打ち寄せていたそうです。8月31日、香炉は元の場所に最設置されました。

## ◆「ウチナージュニアスタディー事業」の平和学習を実施

8月6日、沖縄県知事公室交流推進課主催の「ウチナージュニアスタディー事業」の一環として、当館にて平和学習を実施しました。沖縄から海外に移住した方々の子弟16人（ポリビア、ブラジル、ペルー、アルゼンチン、アメリカ、メキシコ、カナダ、マレーシア、韓国、ドイツ）と県内の青少年16人が参加しました。

参加者は、資料館の見学とアニメ「ひめゆり」（英字幕付）鑑賞後、資料館で感じたことや「平和をつくるための方法」を話し合うワークショップを行いました。海外参加者の一人が、「私の国では大統領に大きな力があるので、政治家が決めたことに従うのが当然と思っていた。でも、沖縄の人たちはそう考えていない。沖縄には平和をつくっていく力があるのではないか。」と発言するなど、お互いの考えを知る中で、さまざまな発見をする機会となったようです。



各地の言葉でお礼を言う参加者

## ◆ハンマーダルシマー平和祈念演奏会

8月6日の広島原爆の日に合わせて、ハンマーダルシマーの平和祈念演奏会が開催されました。「ハンマーダルシマー」とは、台形の木の箱に張られた約70本の鉄の弦をハンマー（木のバチ）で叩いて音を出す「ピアノの先祖」と言われている楽器です。ハンマーダルシマー奏者の稲岡大介さんがコンサートのために来沖するのを機に、当館でも演奏をして頂くことになりました。

ひめゆり学徒が1945年の卒業式に歌うはずだった「別れの曲」や愛唱歌だった「ふるさと」、原爆や戦争反対を歌った「夾竹桃のうた」「アメイジング・グレイス」などが演奏されました。また、JR福知山線脱線事故の犠牲者に思いを寄せて稲岡さんが作曲した「せせらぎ」も演奏されました。

会場となった第6展示室には、稲岡さんの演奏するハンマーダルシマーの澄んだ音色が響き、来場者は静かに耳を傾けていました。



演奏会の様子

## ◆ 2014 年度学芸員実習

今年度も学芸員実習の受け入れを行いました。7月29日から8月9日に琉球大学の仲村紗希さんが、8月26日から9月6日に広島大学の石川結希さんが、それぞれ約2週間の実習を終えました。ここでは実習生のレポートの要約と感想をご紹介します。

### レポート抄録「ひめゆり平和祈念資料館に提案したい子どもたちへの平和学習方法」(要約)

琉球大学法文学部国際言語文化学科 仲村紗希

はじめに

戦争を知らない世代が大半となっているなかで、子どもたちへどのような平和学習方法が可能であるか、これまでに経験した平和学習や教育実習での体験も踏まえて考察したい。

#### ・証言映像・証言集

証言映像や証言集は個人の戦場体験を知ることができる貴重な資料である。戦争体験をどのように捉え、想像したかなど意見や感想を交流させることで、子どもたち自身の考えに立体感がでるのではないだろうか。また、子どもたちがどう理解しているかを指導者も把握し、それに即して補足説明をすることができるのではないか。

教育実習で戦争教材を用いて国語の授業をした際、大半の生徒は感想や意見を書くことを苦手としていた。「戦場の想像ができないからよくわからない」と述べる生徒もいた。あくまで国語の授業として指導していたが、感想を聞くと、どんなふうに関心を持って話を聞き止めたかしっかりと話せる生徒が多かった。感じたことを言葉で書くことに対して苦手意識を持つ生徒がいるようなので、証言映像や証言集から受けたことを、相互に交流することで表現する言葉や考えを深めていけるのではないか。

#### ・フィールドワーク

戦跡に当時の面影が残っているうちに、実際の場所に行くことも平和学習の方法として効果があると考える。慰霊塔やガマなど、人通りが少なくなっているところや自然の中に残る戦跡などは場所を把握できていないために、訪れる機会が少ないのではないか。県内の小中高校生であれば、身近に戦跡があることに気づくだけでも、かつて沖縄で地上戦が行われたことがより現実味を持つことができるのではないか。

#### ・まとめ

平和学習についていくつか考察したが、教育実習の経験からこれらを学校団体、特に小中学校へ提供することは现阶段では難しいと考える。教員



戦跡めぐり (仲村紗希さん)



仲村紗希さん作成のワークシート (一部)



も生徒指導や雑務に追われ、平和学習のために確保される時間が少ないからである。しかし、学童や外部団体など地域と連携した社会教育として続けていくことができれば、いずれ学校も一緒になって平和学習を継続していくことができるようになると思う。

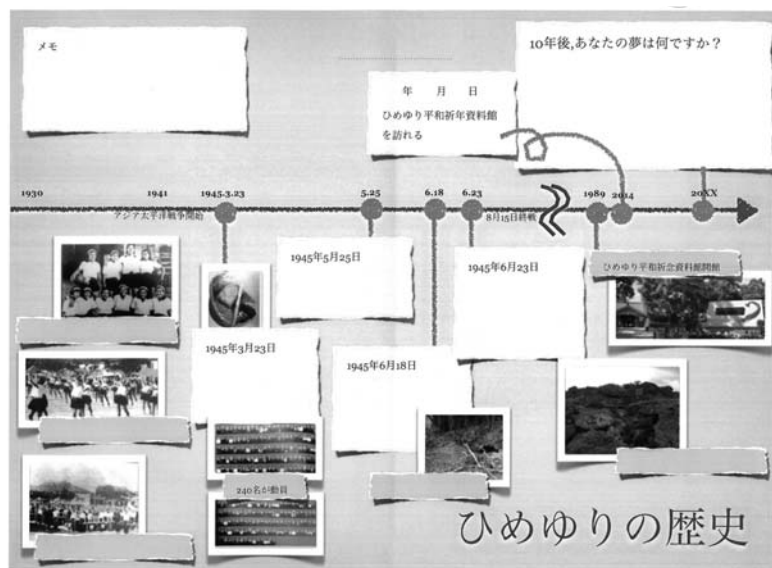
実 習 感 想

広島大学 石川結希

実習を通して、次世代への平和継承に向けて様々な取り組みをされている資料館ならではの貴重な体験をさせていただくことができました。証言員の先生方のご講話や館内でのやりとりを拝見し、ご自身の体験を伝えることに込められた未来の平和への強い思いを感じました。また、これまで資料館に携わってこられた先生方のエネルギーに驚きの連続でした。

学芸員業務の実習では、資料の整理やテープ起こしに関連する本を読んで確かめながら行い、とても勉強になりました。戦跡めぐりでは実際に壕や荒崎海岸で説明をしていただき、臨場感のある体験をすることができました。説明員体験では、来館者とやりとりをする楽しさと、伝えたいことを簡潔に説明することの難しさを感じました。受付業務体験では、チケットや料金の受け渡しに手間取ることもありましたが、若者や外国からもたくさん来館していることや対応の仕方を知ることができました。

様々な業務を体験させていただき、改めて個々の組織が上手く連携して資料館を作り上げていること、そして学芸員の方々は日々勉強しながら業務にあたられていることがわかりました。短い期間ではありましたが、学芸員実習を通して学んだことを研究や今後の学習に活かしていきたいと思います。



石川結希さん作成のワークシート (一部)



集の取材のため、26年ぶりに荒崎海岸を訪れた。その時宮城は、学徒らの自決した穴が、空きびんや弁当箱などのごみで埋まっているのを見て、ショックを受ける。そして、このままではいけない、碑を再建しなければと考え、元ひめゆり学徒隊引率教師だった仲宗根政善に相談する。仲宗根は、「やっと、亡くなった先生や友達のことを考えられるようになったね。とてもうれしいです」と、碑の再建のために当時大金だった100ドルを寄附した。

約3ヶ月後の8月15日<sup>ii</sup>、荒崎海岸に「散華の跡」碑が再建される。費用はひめゆり同窓生や遺族、仲宗根らの寄附によって賄われ<sup>iii</sup>、大きな岩に御影石の石碑が取り付けられた。



1972年に再建された「ひめゆり学徒散華の跡」碑

石碑には「ひめゆり学徒散華の跡」という文字と、遺族瀬良垣宗十の「しまはてに はなとちりにし いとしこよ ゆめやすらげく ねむれとぞいのる」の歌、そして、下記の通り亡くなった教師・生徒の名前が刻まれた。

平良松四郎(一高女教頭)、金城秀子(一高女三年 十五才)、浜比嘉信子(同)、座間味静枝(同)、宮城貞子(一高女四年 十六才)、板良敷良子(同)、宮城登美子(同)、普天間千代子(同)、比嘉勝子(同)、瀬良垣えみ(一高女卒業生 十七才)、上地一子(師範女子部予科 十六才)、仲本ミツ(師範本科 十九才)、安富祖嘉子(同)、比嘉美津子(二高女卒 球部隊筆生) 一九四五年六月廿一日ここに没す、仲栄真助八(一高女教諭)、石川義雄(同) この付近にて没す 一九七二年八月十五日再建。

宮城らと同じ経理部所属だが、荒崎海岸では一緒になかった比嘉勝子(負傷し伊原第一外科壕に残され以後消息不明)、仲栄真助八・石川義雄(荒崎海岸に来る途中壕を探しに行った後消息不明)の3名も含まれている。教師と生徒10名(卒業生、二高女生含む)が自決した岩穴の前には香炉が置かれ、その横の岩には仲宗根の「巖かげに一すじの黒髪乙女ごの 自決の地なり波もとどろに」の歌碑(石碑)も取り付けられた。

沖縄戦33回忌の節目にあたる1977年6月、沖縄県の許可を得てひめゆり同窓会によって、「散華の跡」碑までの岩場にコンクリート敷きの小道がつくられた<sup>iv</sup>。

#### 5. 無断で二つの歌碑が設置される

1993年(月日は不明)、「散華の跡」碑の手前数メートルの岩に、無断で二つの歌碑が貼り付けられた<sup>v</sup>。

歌碑設置の際に「散華の跡」碑までの小道も補修され、段差がある岩場に手すりを設置するなど造作が加えられた。しかし、それらの行為は自然公園法に違反するため、施工者は行政機関から、原状回復をさせられた。

#### 6. 沖縄県立第一高等女学校の校章見つかる

2008年12月31日、一高女生らが自決した荒崎海岸の岩場で沖縄県立第一高等女学校の校章が見つかった。沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」の具志堅隆松代表が発見し、当館に寄贈された。

#### 7. 香炉が一時紛失

2014年8月7日、資料館職員が戦跡めぐりの際に、「散華の跡」碑の香炉が紛失しているのを発見した。8月27日、取材のために荒崎海岸を訪れたテレビ局スタッフが、すぐ近くの岩間(元あった場所のすぐ裏)で香炉を発見。8月31日、香炉は再び設置された。(学芸課 普天間朝佳)

i 終戦直後の1946年1月、教員を速成するために米軍が設立した学校 ii 同碑の刻字より。仲宗根政善著『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川学芸出版2007では、建立月日は8月10日となっている。iii ひめゆり平和祈念資料館所蔵「散華の跡碑再建の寄付者名簿」 iv ひめゆり平和祈念資料館所蔵「ひめゆり同窓会議事録」1974年6月19日 v この歌碑の写真はひめゆり平和祈念資料館所蔵

#### 〔参考文献〕

- ひめゆり平和祈念資料館資料委員会執筆・監修『ひめゆり平和祈念資料館 ガイドブック(展示・証言)』(2004)
- 宮城喜久子著『ひめゆりの少女 十六歳の戦場』(1995)



## 仲宗根政善日記抄 (50)

[1980年] 三月二十四日

〔照屋秀夫兄〕(続き)

鹿児島に疎開していた静子夫人は、和雄、秀則二人の息子を連れて帰って来た。八十を越した母は屋我地に残されていたが、無事だった。家は屋我地我部の入江に面していた。首里から寄留して先祖は代々塩たきが家業であった。まだ塩田がわずかばかり残っていた。おさない子供といっしょに塩たきを始めてやっと暮しを立てていた。しばらく恩給もおろさず、戦後の窮乏にたえておられた。

我部へは、今帰仁天底からくだって、渡舟に乗って行った。舟のないときは渦巻く流れを泳いで渡ったともいう。

同じ下宿にいた頃、夏休みになるとよくあの入江を渡舟に渡って兄の家を訪ねた。三十三年忌のとき、久しぶりに弔いに行ったが、もう渡舟もなく、今帰仁への通路はとぎされて、入江の流ればかりが深くよどんでいた。

兄は子供の時分から生真面目な勉強家であった。座りつづけていた机の下の畳は朽ちてくぼんでいたとも伝えられる。下宿でも、寸暇をおしみながら勉強をつづけた。食事の時も、英語の単語を尋ねては教えていた。

師範学校卒業と同時に、東京高等師範に入学した。ていねいな字で書いた手紙をいつもよこしてくれた。そのはげましがなければあるいは高等学校に入学していなかったかもしれない。

下宿は金城町のヒージャー(樋川)の近くの<sup>あらかち</sup>新垣<sup>くわー</sup>小という家であった。庭は石畳で敷きつめられて福木が数本立っていて、その下かげから、識名坂が見おろされた。慶良間の島をおおう夕雲の美しくたなびくのが、見渡された。

われわれの部屋は東側の奥のうすぐらい部屋でした。その西側が新垣の居間になっており、廊下に機がおかれて近くのアヤメグワールと呼ばれる方が、いつも織物を織っていた。

泉がすぐ近いので、そこへ行ってこんこんと湧く清水で毎朝洗面した。そばにはいつももやしのざるが並んでいた。

照屋兄は毎日のようにあの石畳をのぼって師範に通っていて、歩いている間に、おぼえた単語を一

つ一つ忘れてしまうよと冗談をいっていた。

渡名喜長治君がいっしょであった。彼は腎臓を患い、インク瓶に小便を入れて沸騰させ、沈殿物をしらべていた。早大の高等学院に入学したが中退して、大阪宝塚に住んでいた。姉が共産主義者だったので、彼も左翼にはしって行ったようであった。卒業以来一度も会わない中に世を去ってしまった。

兼次小学校で一級上で、ともに中学にはいり、三年までは、下宿もいっしょであった。父親は兼次小学校の先生で、トゥナーチチョーインと呼ばれて、部落民からしたわれていた。

今度出す「ひめゆりの塔の記」になくなった職員生徒たちの写真を入れたい。終戦直後から私は、生徒一人一人の写真を集め、出来ることなら一人一人についての記録を残したいと思っていた。

三十三年忌のとき、仲吉きよ想思樹会長がなくなったお友達〔の写真〕を集めて、霊前に供えたいと申し出て来た。私の念願しつづけていたことであり、こんなうれしいことはなかった。

同僚のお友達に出来ることなら、その一人一人について思い出を残してほしいともいった。しかし、それはとうとう実現せず終った。

喜屋武断崖に追いつめられて、いよいよ死がせまったとき、私は石のみを手にしていた。誰にもしられずここで死ぬ。死の孤独感にたえなかったのである。この石のみで十三名の名を岩肌に刻んでおこう。そう思ったからである。

写真が何の役に立とう、かえって涙をさそい遺族に新たな悲しみをまさせるではないかとも思ったりする。

ある親は、お友達が写真をかりに行ったとき、何をいまさらとおこられたともいう。親のその気持をよくわかり、一人一人の写真をかかげるのは、親の悲しみをまさせることにもなる。

しかし死に直面したときのあの孤独感を私は忘れることが出来ない。親が友達がそうして生きていたことを知ってほしいのである。自分のことを忘れずにいてほしいのである。

こうして死んで行ったこともずっと忘れずにい

てほしいのである。感傷というかもしれない。人間は忘れ去られたくない。いつまでも思い出してもらいたいのである。

ちょうど三十四年〔前〕の今頃の時刻であったであろう。識名高射砲陣地に空襲で避難していた生徒たちが、寄宿舎に帰って来ていた。三十二軍司令部から、直ちに陸軍病院の勤務につけとの命令は、西岡部長を通じて、すでに生徒たちに伝えられていた。各部屋にはいり戦場へ持って行くべき最少限度の道具をえりわけ、すてるべきものを捨てさろうと血眼になっていた。私は、城岳近くの十空襲で焼け残った家に行き、リュックサックにつめられるだけのものをつめ、図書から家財道具一切を戦火の前におき去って来た。壺屋をすぎる時、火もたかなくなっていたかまが、くらがり大きな口をあいている前を通り、ひめゆり橋の鉄橋を渡って、部長住宅西門についた。どてにもたれて小声で歌を歌っている生徒もいた。皆といっしょにまだ作業でも行く気持でいたのであろう。死が戦争には必ずひかえているとは彼らは思ってもいないようであった。いささかの不安はあると予感していたにしても、自分が死ぬかもしれないなどは、おそらく誰一人考えていなかったであろう。

やがて部長住宅の庭に全員は整列した。西岡部長は廊下に立って、最後の訓辞を述べた。部長はもちろんこの生徒たちの中から必ず犠牲者が出ると思っていたにちがいない。皇国のためにご奉公すべきときが来たのだ。平素の訓練を發揮して働いてもらいた〔い〕と、いつものことばをくりかえしたが、しんみりした調子だった。

廊下からおりて一人一人に握手したが、生徒の中にはげがらわしく感じた者もいた。やがて西の門から出て、南風原陸軍病院に向かった。

三月二十五日

バクナー中將が、牛島司令官に、「貴方の作戦は立派だった。しかしこれ以上の犠牲者を出すのは無益である」と六月十七日に降伏勧告状を出したようである。大田昌秀氏の以前の著書には、六月十

一日とあったように記憶しているが、「戦争と子ども」には六月十七日になっている。われわれが、波平の壕をひきあげる前日である。あの日までの職員生徒の戦死者はわずかに十名そこらである。もし十七日の時点で、牛島司令官が、勧告を受諾して、降伏していたとすれば、犠牲者はわずかに十名そこらでとまっていた。ひめゆりの塔に祀られている職員生徒は二百二十一名である。翌十八日バクナー中將は波平の壕からごく近くの国吉の丘陵上で、日本軍の狙撃兵にねらわれて戦死した。

牛島中將は、摩文仁が丘の頂上で、将兵一般民が刻々死んで行くのを眺めている。本土戦を一刻も伸ばす作戦だという。多分、自らの死も刻々せまりつつあることを感じているにちが〔い〕ない。一体どうして、これら幾万の将兵住民の生命が刻々と消え行くのを平然と見ておれたのか。これら幾万の将兵住民を道づれにしなければ死にきれなかったのか。命は鴻毛よりも軽しとする軍人のドグマがある。生命は地球よりも重しとす〔る〕考えなどは毛頭なかった。司令官の壕の真下の師範学校男子部、鉄血勤皇隊の壕の中には、野田貞雄校長がおられた。首里の留魂壕におられたときから一人一人死んで行った生徒の遺骸を枕べにおいて香をたいておられたという。必ず生きぬけと言いのこして生徒に別れを告げた。

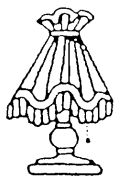
二百余名の屍のうずまる摩文仁野を見おろして野田校長が摩文仁岳の頂上に立っておられる。

命を鴻毛よりも軽しとする武將牛島満司令官  
命を地球よりも重しとする文官野田貞雄校長  
将来にわたって果して日本はシベリアンコントロールを貫きうるのか。やがて軍部が台頭し、幾万の死に行く国民を平然と見るようになるのではあるまいか。人間が人間を殺す戦争をいかなる理由によっても正当化することは不可能である。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。

旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。

※〔 〕は編集で補った。



# 本棚

元琉球大学教授 仲程昌徳

## 大田昌秀 『大田昌秀が説く沖縄戦の深層』

多くの書は、沖縄戦を4月1日に始まり6月23日に終わったと記述しているが、それは違うと大田昌秀は言う。大田は、沖縄戦が始まったのは3月26日であり、終わったのは9月7日だとするのが妥当だという。大田のその見解は、本書で始めて明らかにされたわけではなく、すでに他の著書でも述べていたことであるが、それをあえて繰り返しているのは、一般的に言われている日にちを踏まえてしまうと、重要な問題を見逃してしまうことになるからだという。

沖縄戦の始まりを4月1日だとすると、慶良間諸島で起こった「守備軍将兵の直接・間接の強制によって多数の住民が「集団自決」を執行した」という出来事が、「沖縄戦史から完全にきえてしまう」だけでなく、あと一つ「ニミッツ布告」として知られる「沖縄を日本から分離したという意味できわめて重要な」声明も史実から排除されてしまう結果になるからだという。また、沖縄戦が6月23日に終わったとすると、久米島で起こった「日本軍海軍通信隊が地元住民にスパイの汚名を着せ二〇人を虐殺した他、ほぼ同数近くの守備軍兵士をも殺りくした事件」、いわゆる「久米島事件」が「沖縄戦の歴史から抹殺されてしまい」かねないし、さらには、マッカーサー元帥の命を受けた第一〇軍司令官ジョセフ・スチルウェル大将が、日本軍に無条件降伏を勧告し、沖縄にいた日本軍が正式に降伏したのが9月7日であったという事実も消えてしまうことになるという。

このことは、単に4月1日以前の出来事および6月23日以後の出来事が、史実から消えてしまいかねないというだけでなく、沖縄戦に突入していくまでの日本と沖縄の関係、そして沖縄戦後のアメリカと沖縄との関係を語る象徴的な出来事が抹殺されていくことにもなる、という点にあった。

大田は、同書で、「琉球処分」以降の歴史を概観し、沖縄が戦争に巻き込まれていった過程を検討していくとともに、戦場となり、眼を覆わざるをえないほどの惨劇を現出させた原因が何処にあったかを探っていくなかで、期せずして「もしも」という言葉を三度も繰り返し用い、大切な出来事を述べていた。最初の「もしも」を大田は、「歴史に“もしも”とい

うことはあり得ないとしても、沖縄が琉球処分によって日本の一県に併合された一大変動期において、もしも明治政府が琉球王府代表の主張を受け入れて、沖縄に軍隊を常駐させず軍用地の強制収容を見合わせていたら、おそらく沖縄戦の悲劇は避けられたかもしれません」と述べていた。次のそれは、河上肇の沖縄での講演に触れながら「歴史には“もしも”といった仮定は成り立たないとは言え、もしもこのとき、沖縄の指導者たちが、河上助教授の発言を謙虚に受けとめ、日本帝国が追求して止まなかった富国強兵の中身を吟味し、かつ沖縄でやみくもに推進されていた日本化＝皇民化の内実を真剣に検証していたとすれば、おそらくは後に続く沖縄の惨禍は、いくらかなりとも避けられたにちがいません」という「もしも」であり、あと一つのそれは、シモン・バックナー中将が、牛島司令官に送った降伏勧告状に触れた箇所で「もしも此の時点で牛島司令官がこの勧告を受け入れていたら、おそらく守備軍将兵および南部一帯の戦線を彷徨していた住民の犠牲は、大幅に減少したにちがいません」という「もしも」であった。

歴史に、「もしも」という仮定はなりたないとしながら、三度「もしも」と繰り返しているのは、沖縄の「悲劇」「惨禍」「犠牲」のおびただしさを、無念に思う心所から出ていたといっていいたいだろう。

大田が、「血であがなったもの」以後、数多くの沖縄戦に関する書を刊行してきたのは、他でもなくその無念の思いに発していたが、もちろんそこで立ち止まっていたわけではない。大田は、自らの体験を通し、戦争になれば「平和を守る」といった名目などすぐに吹きとんでしまい「非人間的な恐るべき殺りく競争」になるといい、さらに語を強めて、今一度戦争が起これば「核戦争」であり、いかなる対策をたてようと「無意味」であるに違いないことからして、今、全力をあげてなさなければならないのは、「戦争を防止すること」だという。そのためには、「軍隊の本質について、いささかも甘い幻想を抱いてはいけない」のであり、「憲法の理念を自らの血とし肉と化して」いく以外にはないという。沖縄戦の深層＝真相をわかりやすく説いた警醒の書である。



# 声

## 平和な時代を後世へ引き継いでいかねば

東京都 教員

日増しに春めいてまいりましたが、皆様お変わりなくお過ごしのことと存じます。

先日は、本校修学旅行において、ご多忙中にもかかわらず丁寧なご講演を拝聴させていただき、誠にありがとうございました。

お恥ずかしながら生徒のみならず、私自身も初めてひめゆり学徒隊の体験談を拝聴させていただきました。歴史の授業やテレビ等の媒体を通し、“戦争”というものを理解しているつもりでした。しかし、今回その時代を生きてこられた方の貴重な体験談を拝聴させていただくことにより、自分の戦争認識の浅さに恥じらひを感じさせられたとともに、平和な時代に生まれてきたことへの感謝の気持ちとこの時代を後世へと引き継いでいかねばならないという責任感を深く感じさせられました。

また、生徒たちの修学旅行の感想文の多くが、平和学習に関するもので、彼らも私と同様、これから生きていく上での強い責任を背負って帰京してきたように感じました。

今後は、今回ご教授いただきました貴重な体験を糧とし、責任と自覚を持って日々精進してまいりたいと存じます。

まだまだ朝夕冷え込むときがございませう。何卒、体調をお崩しになりませぬよう、お祈り申し上げます。

## 相思樹

悼む人々のつらなり

説明員 仲田晃子

六月二十三日の慰霊の日前後には、修学旅行や観光でいらつしやる方々に加えて、亡くなった教師、生徒たちのご遺族がひめゆりの塔に訪れます。慰霊祭の混雑をさけて訪れる方々は、柵の中の小さなひめゆりの塔とその側にある刻銘碑に、小さな重箱やお菓子、飲み物、お花、お線香などを手向けて手を合わせていらつしやいます。毎年その姿を見ると、普段は観光地の様相をみせているひめゆりの塔が、亡くなった家族を弔う大切な場であり続けていることを改めて知らされます。

ここ数年は、若い世代の姿も目立つようになりました。亡くなった生徒の甥御さんや姪御さんにあたる方とご家族です。戦後生まれで亡くなった生徒を直接知らない方たちですが、母が毎年必ず来ていたから、祖母の妹がいるので、といらつしやいます。家族からずつと聞かされてきたと、ご自身が生まれる何十年前も前に、まだ十代で亡くなつてしまつた大叔母のことを話してくださる方もいらつしやいました。沖縄戦で亡くなったその生徒が、かけがえないひとりとして、またその死を無念の死として大切に語り、弔つてこられたご家族の姿が浮かぶようでした。

母にかわつてお線香をあげさせて下さいとおつしやる方がいらつしやいました。ご遺族だと思ひお話を伺うと、お母様はひめゆりの同窓生で、亡くなった後輩達を想ひ、慰霊祭にはできるだけ本土から駆け付けていたとのこと。ご遺族でもなく、同窓生のお子さんがこのようにいらしたことは、おたずねしなければ気がつかなくつたことでした。

このところご遺族も御高齢になり、慰霊祭もさびしくなつていくと感じていましたが、今年は、他にもこのような方とお話することがあり、亡くなった生徒を大切に悼んでいた人々の姿からその意思を受け取つている人々の存在を感じることができました。



## 資料館ガイド

### ◆平和講話・証言ビデオ「平和への祈り」、アニメ「ひめゆり」視聴ご案内

多目的ホールでは、元ひめゆり学徒の講話(約30～45分)や証言ビデオ(25分)、アニメ「ひめゆり」(30分)を視聴することができます。映像上映に説明員(職員)による解説を付加する「説明員トーク」も行っています。詳しくはお問い合わせ下さい。※ご予約が必要です。(20名以上の資料館見学団体対象)

※2015年4月以降「元ひめゆり学徒の講話」は終了となり「次世代の平和講話」での受付となります。ご了承下さい。

【講話】 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00

【ビデオ】 9:10 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00

※毎週月曜日・年末年始(12月30日、31日、1月1日～3日)・旧盆(旧暦7月13日～16日)は講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後(6月21日～24日)は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

- 最大収容人員：200人(席)
- 資料館へ入館していただく場合に限りさせていただきます。
- ホールは講話・ビデオ以外の目的(セレモニー等)には利用できません。
- 予約時間に遅れた場合、予約状況によってキャンセルさせていただくこともございます。

### ◆VTR室のご利用について

下記についてビデオを視聴することができます。

- ◇「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」(25分)
- ◇「仲宗根政善—浄魂を抱いた生涯」(30分)
- ◇「ひめゆり学徒の戦後」(33分)
- ◇「戦火に消えた21の学園」(26分)
- ◇アニメ「ひめゆり」(約30分)



多目的ホール

### ◆資料館ご利用案内

①入館受付 午前9時～午後5時(閉館は午後5時25分)

②休館日 年中無休

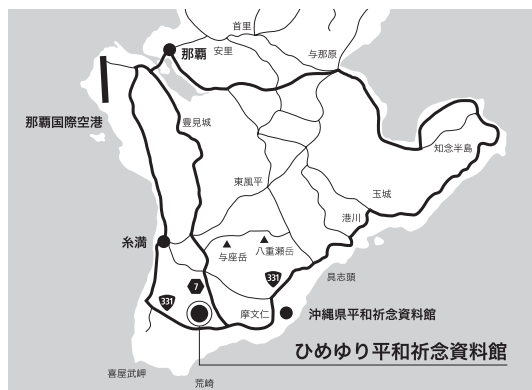
③入館料 大人¥310 高校生¥210 小・中学生¥110  
団体料金(20名以上)  
大人¥280 高校生¥190 小・中学生¥100

#### ④交通

【バス】旭橋・那覇バスターミナルから〔89〕で約30分、糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え約15分、ひめゆりの塔前バス停で下車

【モノレール・バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約4分、赤嶺駅前(糸満・豊崎向け)バス停で〔89〕に乗り、約20分。糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え約15分、ひめゆりの塔前バス停で下車

【車】那覇空港より約30分



ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第54号

2014年(平成26年)11月30日発行

編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館  
〒901-0344 沖縄県糸満市字伊原 671-1 ☎ 098-997-2100

URL <http://www.himeyuri.or.jp/>